

## 巻頭言

叢書「コンフリクトの人文学」の刊行に寄せて —— 小泉潤二・栗本英世 —— III

## はじめに

コンフリクトのなかの芸術と表現

文化的ダイナミズムの地平 —— 岡府寺司 —— V

## 第 I 部 地域とナショナリティ

### 第 1 章

自己／他者の表象をめぐる闘争

征服後メキシコの先住民エリートと文化境界上の美術 —— 岡田裕成 —— 003

はじめに

1. モチーフとしての「先住民」
  2. 交渉する植民地先住民エリート——「美術」への参入
  3. 紋章の盾——図像をめぐる闘争
- 結びにかえて——文化境界上の美術

### 第 2 章

民族対立のなかの学知

アウグスト・ザウアーの地域文学史構想 —— 三谷研爾 —— 041

1. 紛争地ボヘミア——言語と民族
2. ザウアー『文学史と民俗学』の構図
3. ハウフェンのボヘミア・ドイツ民俗学
4. ローカリズム／ナショナリズム——ブラハ・ドイツ社会の隘路

### 第 3 章

せめぎ合う「民謡」概念

『モラヴィア恋歌集』の編纂をめぐる

レオシュ・ヤナーチェクとズデニェク・ネイェドリーとの対立 —— 中村 真 —— 061

はじめに

1. 1920年代におけるヤナーチェクの民謡研究活動
  2. 『モラヴィア恋歌集』編纂時に生じた軋轢
  3. ネイェドリーによるヤナーチェクの記譜法の批判
  4. ヤナーチェクが自身の記譜法を改めなかった理由
- 結論

#### 第4章

##### シマノフスキの創作活動におけるジレンマ

歌曲集《スウォピェヴニエ》作品46bisに見る新しい民族音楽の萌芽

重川真紀 — 083

はじめに

1. ポーランド・ナショナリズムとの確執
2. 歌曲集《スウォピェヴニエ》作品46bis

おわりに

#### 第5章

##### ポーランドのネオ前衛

クシシュトフ・ヴォディチコとその周辺 ————— 加須屋明子 — 105

はじめに

1. 第二次世界大戦後のポーランド情勢
2. 冷戦期におけるポーランドのネオ前衛
3. ヴォディチコの初期の活動とその意義

おわりに

#### 第6章

##### 伝統と創造性の狭間で

なぜジューバン *Jewban*・パフォーマーはアイデンティティを表現するのか？

————— 川端美都子 — 127

導入

1. 「ジューバン」の誕生
2. ジューバン・アイデンティティと音楽表演

終わりに

## 第II部 移動する芸術家、流通する芸術

#### 第7章

##### 中東欧のなかの作曲家たち

三つのスケッチ ————— 伊東信宏 — 149

1. 「ハイドンのユタヤ」
2. マーラーが聞いた「ボヘミアの村のバンド」
3. トウルナヴェニ——リゲティの生家

## 第8章

モホイ＝ナジの書簡にみる戦時下の亡命芸術家の苦悩 ――― 井口壽乃 ― 165

はじめに

1. シカゴ芸術・産業協会とニュー・バウハウス設立の背景と実態
2. デザイン学校に対するワルター・ペブケの支援
3. フレデリック・キースラーとの対話
4. 戦時下のモホイ＝ナジの政治活動

おわりに

## 第9章

19世紀イタリアにおける美術品市場

マルケ地方における祭壇画売却をめぐるコンフリクト ――― 上原真依 ― 195

はじめに

1. 19世紀の教皇領下での美術品保護
2. カルロ・クリヴェッリ《聖母子》(フォルチェ祭壇画)をめぐるコンフリクト(1826年)
3. ヴィットーレ・クリヴェッリ《玉座の聖母子と寄進者たち》売却をめぐるコンフリクト(1838-40年)

むすび

## 第10章

中山晋平の音階論

「新しさ」と「民謡」の順接と逆接 ――― 齋藤 桂 ― 217

はじめに

1. 新民謡の歴史
2. 中山の音階論
3. 良い音楽と悪い音楽

複数の価値観の葛藤と継続 ―おわりに

## 第11章

チェコ人ヴァイオリニスト、パウル・クリングと日本

NHK交響楽団における活動を中心に ――― 家田 恭 ― 235

はじめに

1. パウル・クリングの生涯
2. パウル・クリングの日本における活動 ―NHK交響楽団での活動を中心に
3. 歌劇《売られた花嫁》の初演
4. パウル・クリングの評価 ―彼は日本でどうみられたか

結び

## 第12章

### ROCIプロジェクトと文化的時差

制度としての現代美術のグローバル化について ————— 池上裕子 — 257

序

1. ROCI China開催の経緯
  2. ラウシェンバーグと北京のアンダーグラウンド作家達の出会
  3. ROCI Japanと信楽
  4. ROCI Malaysiaとの比較
- 結び

## 第13章

### 美術館は誰のものか

沖縄県立美術館の事例から ————— 吉澤弥生 — 283

1. 公立美術館の現状
2. 沖縄県立美術館、設立の経緯
3. 沖縄県立美術館の事例にみる、美術館の問題
4. 美術館と市民社会

## 第Ⅲ部 〈身体〉とアイデンティティ 東欧ユダヤにおける事例

## 第14章

### 「根なし草」と「肉体の主」

M・Y・ベルディチェフスキーとユダヤ文化革命の両義性 ————— 赤尾光春 — 305

はじめに

1. M・Y・ベルディチェフスキーの生涯
2. 書か剣か——アハド・ハアムとベルディチェフスキー
3. 「肉体の主」と「根なし草」
4. 性愛の挫折と民族性——「カラスは飛び去った」
5. 禁忌と侵犯の弁証法——「二つの陣営」から『雷の隠れ処で』へ  
おわりに

## 第15章

### カフカの見たベルリン「ユダヤ民族ホーム」

ユダヤ人の身体表象と社会事業の接点 ————— 川島 隆 — 331

1. ユダヤ人の「病んだ」身体
2. ドイツ語圏の社会事業の生成
3. ベルリンの「ユダヤ民族ホーム」
4. カフカが見たホーム

第16章

子どもたちの〈社会主義共和国〉

戦間期ポーランドのユダヤ人療養・教育施設

「メデム・サナトリウム」における「新しい文化」の実験 ————— 西村木綿 — 349

はじめに——「新しいユダヤ人」、「新しい人間」

1. 戦間期ポーランドにおけるユダヤ人自治的教育ネットワークの生成
2. メデム・サナトリウム
3. 「オアシス」としてのメデム・サナトリウム——folkstimlekhkayt

執筆者紹介 ————— 369